
幸せの六ペンス

風立 音無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せの六ペンス

【著者名】

風立 音無

【Zコード】

Z5675D

【あらすじ】

「ごく普通のマンションに住み、リオでの式を夢見る一人。ある日二人はエンジンの故障をきっかけにある「ワインと出会い」とこと。彼らはリオで式を挙げるが…」

(前書き)

この作品は福井市で自費出版されている「庄内通信第十一号」に掲載された拙作品を手直しし転載されたものです 風立 音無

幸せの六ペンス

風立音無

「だからさあ」

「んー」

「今日は行きたいわけ」

「だあめ」

鏡子はそういって説志郎の腕を振りほどいた
強く振りほどいたのか説志郎は少しよろめいた
「今日はお稽古の日だから」

説志郎はちょっと手を地に着くとふっとため息をついた

「パソコン?」

「ううん」

鏡子はめがねを少しずつ下ろして言った

「え・い・か・い・わ」

説志郎は手を払い一つ

「シフト制なんだろ」

「今日は休むと只にならないのよ」

庄内センター・ビルの階段は古びてはいるが下りる時には
かんかんと音のする重厚な階段だ

そのかんかんという音をレイゾック・ハイヒールで響かせつつ
鏡子は降りていく

「いこひざ」

「強引過ぎる男はキ・ラ・イ」

鼻に指先が触れた

年上の彼女というものはなぜこんな扱いにくいものか

「どうせ黒人の教師と溺てんだろ」

「くだらない想像。」

彼女は全身をくねらせつゝ言つた

「アンビリーバブル！ 理解できません」

「お前の性格のまゝが理解できな」つーの」

歩道をかんかんと歩きつゝ言つた

「もう30日だぜ」

かんかん

「セイリ曰だる？」

「そりよ」

「じゃあこいつか」

「私だつて事情があるわよ」

鏡子はネクタイをつかみつゝ言つた

「そんなことでは夫として迎えられませーん」

普通は妻を夫がむかえるんだろうつーの！
年上だからつて威張るなよ！

心の声

「とにかく今日はジョージ先生と」

「ジョージ」

「おべんきょ しちやうのー」

「…そんなことでは妻として迎えられません」

「…やだ…」

「え？」

「あなたは… そんなことこつちやだめ」

鏡子はちょっと後ろを振り向いていつた

「キス…して」

「ん…」

触れる

「あなたにそんなことさせられたくないのよ」

「あたしが…迎えるの」

触れる

「明日」わは…行くわ

触れる

「ん…」

「じゃあ英会話ね…」

やつぱり恋人としてパートナーの」とはわかつてやうねば
するり

長身の長い髪がふつと鼻に触れる
少しラズベリーのにおいがした
彼女がグラマラス・ボディーを
ホンダ・アコードの運転席へと滑りせる。

が…が…が…
が…が…が…
が…が…が…
が…が…が…
が…が…が…
が…が…が…
が…が…が…
が…が…が…
が…

「？」

が…が…が…
が…が…が…
が…

「？」

「あら？」

もつ音が…しない

「エンジンあがつちやつた！」

「ほほなんとまあ」

彼女はそれでもキーを回すが一向に音がしない

「やつぱりあのヤブオクの下から2段目のやつひじとくんだった…

「うーんなんとまあ」

「シヨックウ」

「しょうがないな今日は自転車で

「イヤ」

「え」

「あなた直して」

「え」

彼女はボンネットにグラマラスボディをたたきつけると向き直つて

「なおしてよー」と絶叫

後ろの後部座席になだれ込むと

赤いケースを取り出す

修理道具か？

「直して！」

渡されたのはノミ、かんな、げんのう、…

何かのインストールディスクもある

無理だ

といふか直すといふか

まずは充電だらう？

俺はペーパードライバーで車持つてない

といふか普通車の構造ぐらい教習所で習つだらう？

鏡子といふのはとかく謎の多い女だ

「こんなのはより充電！わかる？」

「あーバッテリーねえ」

「バッテリーバッテリー」

「ばつてりーで車が動く」「ふんふん」

「これよねえ」

後部座席の奥から替えのバッテリーを持ち出す

「コレをつなぎかえるのよねえ」

鏡子はバッテリー・エッカーを取り出す

「少ししか電気がないわ」

あまり触れなかつた

「エンジンがかかりやいいのよ」

「コレをこうつないでこう

「あなたやつて」

「んー」

「つひをじつつないで

「う

バチツ

わつ！

「あなた…もしかして」

「うん」

同時に言う

「放電した」

「うそー【冗談】じゃないわよお」

配線をよく見ると

プラスとマイナスがショートしている明らかに配線ミスだ

「どうしよう…」

ためしにチョッカーをもう一度取り出して見る

ほとんど触れない

「…アウトだつたわね」

バン！

ボンネットを彼女がたたく

「あなたのせいよ！」

「ばつかやろーお前がバッテリー・チェック…」

「あなたが…放電させたんじゃない！」

「いつ俺が放電させた！」

「バックレンジヤないわよ！」

「何時何分何秒！」

「17時76分99秒！」

「場所は！」

「庄内センター・ビルガレージ！」

「住所は！」

「大阪府豊中市庄内どこだっけ…」

彼女は少しどもつて向き直り

「あたしは悪くないわよ！」

「バッテリーチェックは基本だろー！」

「今日はたまたま忘れてたのよー！」

「んなんありか…」

「にんげんなんだからー！」

「世の中そんな理屈が通ると思つたなー！」

「うるさいわよー今日は…いくわよー。」

「今日はセイリ日だー。」

「関係ないわよー！」

「やんのかよー！」

「やつてやるわよー」

「ポケットには500円」

「いくわよー」

「おうー！」

「絶対満杯にしてやるんだから」

今日はパチスロの台整理日

あまりいい台は残つていない

「コイン10万枚は取るわよー」

このカツブルは本当に500円から

コイン稼いでいくプロのパチスロ師だ

見る見るコインがたまつていく

大音狂があたりの大人たちを釘付けにしていく

台の調子などお構いなしだ

プロのパチスロ師というのは台を選ばないというのをこの一人は

体現している

鏡子のめがねに見る見る3セブンが写つては消えていく

縦3列横3列ダブルトリプル

二人は鬱憤を台にぶつけた

従業員が止めに入る

「やめてください店が潰れます！」

「一人とも同時にオールセブンが出たときに一人はやめた
「インがざらざら計数機に入れられていく

「人には村田レートというのが店との取り決めで
決められておりコイン一枚1円のところを0・1円になつてはいるが
最近それも意味を持たなくなつてきている

「人はこうやつて結婚資金をためてているのだ
狂の収穫一万三千八百六十九円

「まだまだリオで拳式は遠いわね」

「というかさー新店がオープンしたら1円レートでいけるはず」
「でもそこでもやがては0・1円レートになつちゃつわよ」

「少し手をぬくか

「アマの振りをするの？」

「そしたら1円レートでいけるはず」

「そうねそれもいいかも」

「さてATMで入金だ」

池野恋銀行ATM

キヤッッシュカードをいれ札とコインをじゅうじゅうと入れる
お金見て思い出す

「お前英会話は」

「そんなもんどうでもいいわよ」

「カラーン」

「ん？」

「なんか返却口に出てきた」

「なんだコレ」

「六pence…」

「6ペンス？」

「でもコレ日本国六ペンスって書いてあるわよ」

「おもちやかな」

「円と6ペンスって知つてる?」

空を見上げる

今日は満月だ

「サマセット・ホーム」

「うん」

「とにかく氣味悪い」

「うん」

銀行で日本円に換えてもらおつ

窓口へ

「幸せの六ペンスですね」

「幸せの六ペンス?」

「ええ

「日本円にしてこくらべりこ?」

「くだらないですね

「え?」

「くだらないです」

「くだらない?」

「ええ、くだらない話です」

「あのねえ...」

「次の方どうぞ」

「はあ...」

白髪のおばあちやんがあとに続く

「あの~この5千円崩して...」

「両替ですね」

「変なもん手に入れちゃつたな

「くだらないですって」

「どうせくだらないものよ」

「自動販売機で10円くらっこむくなるんじゃない?」

「そつするか」

自動販売機で

「コーラを買おう」

「あ

「ん?」

「財布の中全部入金してた」

「ばつかでー」

「だつてー」

「六ペンス入れるか」

チャリーン

「買えるわけないじやん」

「一応押すぞ」

がたん

「…買えた」

「ふーん」

「100円に近かったのか」

ふしゅつ

「アーッうめ。半分ずつな」

「…あれ?」

「んー?」

「六ペンス…戻つてる」

「え?」

鏡子の右手にあるのは確かに六ペンス

「壊れてんのかな」

自動販売機をたたいてみる

「ひょっとして…」

「もう一回入れるぞ」

チャリーン

今度はオレンジジュースを買つてみる

がたん

チャーリー

返却口には

六ペンス

「ラッキー」

30分後

山のよくな山缶

「うーもう飲めない」

「六ペンスまだある?」

鏡子が右手を出す

…六ペンス

「す„いな」

「とこ„か明日店のおじさんこ謝つておいたほ„が」

「そ„だなある意味だましだもんな」

「帰りたくなつたわね」

「帰りつか」

「その前に新聞かつてこい」

「やこのパンデリード?」

「うと」

パンデリード

「こ„りつしゃこませ」

「新聞…毎日新聞」

「はい170円です」

「あ」

「お金ないんだつた…」

「六ペンスしか„いのな」

「あのーー応日本国つて書いてあるんで

「はー、幸せの六ペンスですね」

「あー」

「はい新聞です」

「新聞買えちゃつたね」

「早く帰ろつぜ」

自動ドアの前に立つ

自動ドアが開く

「お密様」

「あー…」

「怒られるわ」

「おつりお忘れですよ」

「え?」

「あ、ああ」

「いぐらっ..」

「六ペンスです」

「え」

「ですから六ペンスおつりです」

「あのー…」

「からかってるんですか」

「おつりをお受け取りください」

「あのね普通お金のシステムってねえ…」

「お受け取りください」

「じゃあコレ返します」

新聞を返そうとする

「返品ですか?」

「返品?」

「返品伝票をお書きします」

「が早いか返品伝票をさせの六ペンスと書かれ

六ペンスを返される

「そつそつこれでいいのよ

「もうからかうなよ」「タバコ切れでら」「六ペンスで払うよ」「タバコは何にしますか」「若葉一カートン」「六ペンスのお返しです」
結局俺たちは若葉一カートンと六ペンスを持って店を出た

「ゼッテーおかしい」「そうね」「あの店もう行かない」「ひ」「う」「そうね」「後でふんだくられるぞ」「そうね」「とにかく六ペンスはあるんだなあ」「ねえ」「ん?」「この六ペンスって何でも買えるって言つたか」「買えるって言つたか?」「もらえるんじやないかしら」「何でも?」「何でも」「じゃあ車買つて帰るの?」「買つて言つかもらうだろ」「そうね」

空にはまだ月が輝いている

気がつくと二人は
ぼつとしながら
カーディーラーで説明を聞いてた
価格は350万円

恐る恐る六ペンス出す

「幸せの六ペンスでお買い上げですね
キーをもひつて

「幸せの六ペンスお返しです」

あれから不動産、ヨット、クルーザー
冷蔵庫、洗濯機、乾燥機：

日用品、食料品、ツマヨウジにいたるまで
全部六ペンスで買ったというかもうえた

「六ペンスつてすごいわねえ」

「絶対手放さないぞ」

「ねえ」

「六ペンスで式挙げちゃおつか」

「俺も考えてた」

「六ペンスでリオで式！」

「リオで式！」

旅行会社に問い合わせる

旅行も六ペンスでできた

リオの式は地元の人みんなで祝福してくれた

いい式だった

お土産も六ペンスで買った

六ペンスですべてを手に入れ結婚まで

できた

二人は夜に結ばれた

まさに幸せの六ペンスだった

帰りの飛行機で

「ねえ」

「なに」

「幸せだねえ」

「幸せだねえ」

「幸せだねえ」

「ねえキスしよ」

「うん」

ひさしごりのディープ・キス。

「コレがあれば何でももらえるねえ」

「というか貯蓄六ペンスだけどな」

「ねえ入籍いつしよう」

「そういえば決めてなかつたな」

「今度の水曜あたりどうだ」

「いいねえ」

水曜日豊中市役所

「文書料六ペンスです」

「ん?」

「そういえば」

ボールペンの手を止め妻が言った

「六ペンスぐださいって言われたの初めてだねえ」

「そうだね」

「なんか悪い予感がする」

「やめてくれよ入籍するんだから」

「六ペンスです」

「はい受理されました」

「あのー」

「はー」

「六ペンスは」

「お返しできませんよ

「え」

「だからお返しできません」

「えつ、それってどうこう...」

「どうこうことー」

「入籍したら六ペンス使えませんよ」

「そんなつ」

「あたりまえでしょ」

「僕らはすゞごと帰るしかなかつた

入籍はできた

六ペンスは失つた

「大変大変！」

ゴルフクラブを磨いていると

おなかの大きい鏡子が駆け込んできた

「ベビーに障るぞどうした」

「六ペンスが売つてるよ

「なに！」

インターネットームに駆け込む

「幸運の六ペンス販売中」

ショップ名はジェイコインズ

250円

「えらく安いな

手に入れるか

3日後届いた

6ペンス

かつて在りし六ペンスとは違う

イギリス6PENCE

日本国六ペンスとは明らかに違つ

「使ってみよう」

自動販売機に入れてみたが

何も買えずに6ペンス出でてきた

銀行では

「お取り扱いできません」

パン屋のおばさんには

「6ペンス、へえ」

程なくして

「使えないね」

どこへ行っても

6ペンスは使えなかつた

空には月の輝く晩

妻は確かに幸せの6ペンスを握り締めていた

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5675d/>

幸せの六ペンス

2010年10月28日08時01分発行